

## 集團心理現象の概念及び本質

米田庄太郎

### 二

前節に於て、余は伊太利の一派の學者、所謂集團心理學者が集團心理現象を以て社會心理現象とは甚だ親密なる關係を有するが而も之れと相對立する獨立なる一部類の現象と觀念して、社會心理學に對立する獨立なる一科學として集團心理學なるものを新たに建設せんとする理由を説述し、且つ之れに對するやはり伊太利の學者の批評を説述して、以て其の見解の穩當ならざるを示したが、今集團心理現象なるものは社會心理現象と相對立する獨立なる一部類の現象として觀念せらる可きものでないとするれば、吾人が兩者の關係に付て正當に立て得らるゝ見解は左の二種の何れかであらねばならぬ。一は集團心理現象を全く社會心理現象と同一視することにして、二は前者を以て後者の一種と見ることである。而して今日最も廣く行はれ

て居る見解殊に英米獨佛等の諸國の學界に於て行はれて居る見解は第一種の見解にして、即ち兩者を同一視するものである。又英米佛等に於ては社會心理學と集團心理學とは一般に同一視せられ、獨逸に於ては更に此等と民族心理學とは一般に同一視されて居る。それで茲に先づ此種の見解を簡單に論評して置かうと思ふ。

今社會心理現象と集團心理現象更に民族心理現象とを同一視する見解を批判的に考察せんとするに當て、先づ注意す可き一問題がある。夫れは一切の社會現象或は文化現象を其の眞髓から見れば總て社會心理現象或は集團心理現象或は民族心理現象であるとする見解と、之を社會心理現象或は集團心理現象或は民族心理現象と歴史現象との二種の部類に根本的に區分して見る見解との何れが穩當であるかと云ふ問題である。前者の見解は社會學者の間に一般に行はるゝものなるが後者の見解はヴント一派の民族心理學者の間に大に重要視さるゝものである。但し社會學者間にありてもコストの如く社會現象と觀念或は理想現象 *ideologique* とを區分せんとするとするが如き人々の説は根本的にはヴント一派の人々の説と同じ見解を抱くものと見做すことが出来る。(Coste, *Les principes d'une Sociologie objective.*) 而して余はヴントの立てた民族心理現象と歴史現象との區別は、甚だ深奥なる意味を含蓄

するものなるを認むるに係らず、同氏の如くに此區別をあまりに重要視し、高調して之を以て氏の民族心理學、即ち余輩の社會學と歴史的精神的科學、即ち余輩の社會科學或は文化科學と稱するものとを區別する基礎となさんとするは穩當でないと考へる。(「心理研究」に於ける拙稿、ヴェントの民族心理學と余輩の社會學參考)。

ヴェントの考ふる處にはれば民族心理或は集團心理或は社會心理現象は箇人の結合及び相互作用、或は心理的相互作用 Die Verbindung und Wechselwirkung der Individuen die psychische Wechselwirkungより生起するものにして、歴史現象とは特に箇人の創造或は箇人の働きより生起するものである。つまり前者は一般的 *generelle* のものにして、後者は箇性的特異的 *individuelle, Singuläre* のものである。而して氏は民族心理現象を歴史現象より區別する特徴として、(一)其の生起或は出現に於て不定なる多數の箇人が協働したと考へらるゝこと、及び(二)種々歴史的に制約されたる差異あるに係らず、一定の普遍妥當なる發達法則の作用が其の中に認めらるることの二者をあげ、又歴史現象を民族心理現象より區別する特徴として、(一)箇人格が其の箇人的特性によりて決定されたる意志方向に従ふて關涉せること、或は勢力を及ぼせることが、直接に證明し得らるゝこと、(此の箇人的關涉或は勢力の存在によりて現象の一系列は、共

同的生活の上に影響を及ぼすことが出来るが而も其の起源に於て民族精神に屬せざるものとして認められるのである(及び(二)動機の一定の秤量を前定する任意的なる行動の領分であると云ふことの二者を説いて居る。此くてヴントは民族心理學の材料を主として自然人民の生活に於て求むることになつて居るのである。又氏は始め民族心理學の對象を言語神話及び風俗習慣(風俗)の三現象に限定せんとしたのである。Wundt, Ziele und Wege der Völkerpsychologie, Philos. Studien, Bd. IV. Völkerpsychologie. I. Bd. I. Teil. Logik. II. Bd. II. Teil, Probleme der Völkerpsychologie. 1911.

今ヴントの民族心理現象と歴史現象との區別は確かに深奥なる意味を含蓄して居る。又氏の歴史現象の概念は近來リツカートによりて詳しく展開されたる歴史の概念の骨髓を包藏して居ると思ふ。Ricke, Naturwissenschaft und Kulturwissenschaft. 2. A. 1910. Die Grenzen der naturwissenschaftlichen Begriffsbildung. 3. A. 1913(但しリツカートの歴史概念は本來ウインデルバントの思想より出發して居るが、又ヴントの思想の影響をも受けて居ると思はれるのである)。更にヴントの此區別は社會學及び史學に於ける箇人主義(個人主義)と團體主義との調和を企つるものとして、余は殊に興味を感じて居る。即ち氏は民族心理現象の概念に於て團體主義の思想を取り入れ、而して歴史現象の概念に

於て箇人主義の思想を取り入れんとして居つて、此の區別によりて兩主義を結合せんと企てゝ居ると思はれるのである。而して諸般の社會現象或は文化現象に於て、箇人的勢力の直接に或は明白に或は著しく見ゆるものと、不定なる多數者或は團體の協働によりて生起したと見做されるものとの差別は實際上に於て明らかに認められる場合は少なくない。而も直接には箇人的勢力の著しく見ゆるに係らず、深く又詳しく探究して見ると、眞實には不定なる多數者の協働は甚だ重大なる影響を及ぼして居つて、箇人的影響が比較的に微弱なるものであることが發見される場合は少なくないと同時に、表面上に於ては、別に箇人的勢力が現れて居らず、全く不定なる多數者の協働によりて生起せるものの如くに考へられて、而も眞實には箇人的勢力の大なることが發見される場合も少なくないのである。例へばゲンツが全く箇人の結合及び相互作用より生起し發達するものと見做し、民族心理學特有の對象と考ふる處のかの言語の如き、神話の如き、風俗習慣の如きものも、箇々の場合に付て詳しく探究して見ると、假令歴史上の事實によりて明らかに證明することが出来ないにしても、偉人或は天才の創造が其の中核をなして生起し發達せるものと推察するに非ずは、正當に解釋することが出来ないと思はるゝものは少なくない。否な余輩の

見る處によれば其の殆んど總てがそうであると思はれるのである。而して余がヴェントの民族心理現象と歴史現象との區別に付て殊に不満足を感ずるのは、氏が民族必理現象の基礎と見る處の箇人の心理的相互作用即ち余が心と心の相互作用と稱するもの其物に付て詳しく分析的研究を加へて居らないとである。即ち心と心の相互作用の過程に就ては一向注意せず、只其生産物のみを付て、研究して居るとである。是れ氏がラツェルス、シュタインタール派の餘りに茫漠たる民族心理學の概念を嚴格に限定して明確なる科學的概念を決定せんと企てたこと、又生理的心理学に對立させて民族心理學の概念を決定せんと企てたこととの結果であると思はれるが、とにかく氏が心と心の相互作用の過程によく注意しなかつたことが、氏をして氏の所謂民族心理現象と歴史現象との區別をあまりに嚴格に或は絶對的に觀念するに至らしめた所以であらうと思ふ。而して夫れが爲めに氏は社會心理現象或は集團心理現象と同一視せらるゝ意味に於ての民族心理現象の本義を正當に理解する事が出来なかつたのであらうと信ずる。此事に就ては余は嘗て大學の講義中に論じて置いたが其の後米國の新進社會學者デヴィスも其好著作 *Davis, Psychological Interpretations of Society, 1909* の内にヴェントは箇人の心理的相互作用の研究が社會心に關する

智識の關鍵であることを覺りながら、其の心理的相互作用の過程に就ては何等判然したる説明を與へず、爲めに社會心理の本義を充分に闡明するに至らなかつたことを論じて居る。又近頃社會心理學的研究の近世的發達に關する好著作を公にせるスガンチニもザントが民族心理學の對象に加へたる制限によつて、即ち彼が民族心理學の對象を言語神話及び風俗習慣等の社會心理的生産物に制限せることによりて却て心理的相互作用の過程の研究の必要が益々明亮になつたと云ふて居る。 *Die Fortschritte der Völkerpsychologie von Lazarus bis Wundt, 1911.* 要するにザントの民族心理學の研究は其成遂げたる範圍内に於て社會心理の研究上大に貢獻して居るが併し心理的相互作用或は心と心の相互作用の過程其物の研究に着目せざりしが爲めに、十分に社會心理現象の骨髓に觸れることが出來ず、又社會心理現象の真相に就て一種の謬見を生じたのであると思ふ。尙ほザントの民族心理現象と歴史現象との區別は實際上之を嚴密に保持することが如何に困難であるかは、氏が民族心理學と歴史學とが密接に接觸する中間帶ツキイセシヤベリトの存在するを認めて居ることや、又實際上氏の民族心理學の研究中に氏の歴史現象と觀念するものが多く含まれて居ることなどを見ても明らかである。殊に氏の民族心理學上の最近の著作 *Die Elemente der*

718 Völkerpsychologie, 1912. 及び Die Nationen und ihre Philosophie, 1915 等を見れば、氏は實際上  
どれほどまで民族心理現象と歴史現象との區別を保持されて居るかは疑問である。  
而て余が余の社會學の體系に於て純正社會學と稱する部門、即ち社會心理學の包括  
的組織的概念の上から云へば一般的社會心理學とか、又は社會心理學原論とか稱す  
可きものに當る部門に於て、特に心理的相互作用或は心と心の相互作用の過程の詳  
しき分析的研究を試みて居るのであるが、今其研究によれば、一切の社會現象或は文化  
現象は其の眞髓に於て社會心理的のもの、即ち心と心の相互作用であつて、而して其  
の心と心の相互作用は何れの場合に於ても、其の程度或は強度の大小こそ異なれ、常  
に箇人的勢力を含有して居るのである。此の事に就ては後に集團心理現象の本質  
に關するジムメルやブレインナーなどの新説を論評するに當てや、詳しく述べや  
うと思ふから、茲では只余は心と心の相互作用は何れの場合に於ても箇人的勢力を  
含有するもの或は或箇人の精神的行動を中心として發生するものと考へることを  
述べ、而してかゝる見解から見てザントの解するが如き意味に於て民族心理現象と  
歴史現象とを區別することは原則としては穩當でないと云ふに止めて置く。

却說以上論じ來りし如く、一切の社會現象或は文化現象は其の眞髓に於て社會心



理的のもの、即ち社會心理現象にしてしかして其の中には歴史現象をも包括するものにして、之れと相對立するものでないとすれば、社會心理現象を集團心理現象及び民族心理現象と同一視する見解は如何に評價さる可きかといふに、此見解はさきにも述べし如く、英米獨佛等の學界に於て一般に行はれて居るに係らず、余は何れの方面より考察しても、科學的嚴密を守らんとする以上は穩當でないと思へるのである。而して余は社會心理現象なるものを最も廣大なる部類概念と見做し、集團心理現象も亦民族心理現象も其一種と見るが最も穩當なる見解と考へるのである。

今社會心理現象を以て一般に解せらるゝ如く、つまり心と心、或は箇人と箇人との親和團結を意味するもの、或は之を基礎として發現する共同的思想、感情、意志、行動等であると觀念するに於ては、之を集團心理現象と同一視するは別に不都合はないかも知れない。而もかゝる二ヶの術語の存在する以上は、其間に一定の差別を立て、夫れ夫れ特別の意味を有せしむることは、思想上の經濟であり、又言語上の經濟であると思ふ。文藝に於ては美的趣味の上から見て、或は韻律などの上から見て、同義の數語の存在することは必要かも知れない。併し科學に於ては同義の數語の存在することは徒に思想の混亂を生ずる場合多くして益はない、且つ微細なる科學的差別

を云ひ表はす爲めに言語の不足を感ずる場合が多い。それで出来るだけ異なれる術語には異なる意義を有せしむることが有益であり必要である。されば余は社會心理現象と云ふことが普通に解せらるゝ如く心と心の親和團結を意味し、又は之を基礎として發現する共同的心理現象を意味する場合に於ては、集團心理現象なる語は特に其の一方面、即ち社會圈及び社會團體の共同的なる心理的特性及びかゝる特性より直接に發現すると見做さるゝ共同的心理現象を包括的に云ひ表はすものと云ふ意味に用ひたいと思ふ。而してかゝる意味に於て集團心理現象は民族心理現象を包含するもの、即ち民族心理現象は集團心理現象の一種となるのである。つまり民族心理現象なるものは民族と稱する特定の社會圈或は社會團體の共同的なる心理的特性及び夫れより直接に發現すると見做さるゝ共同的心理現象を意味するものとなるのである。此くて集團心理學なるものは社會心理學の一部門にして、而して民族心理學なるものは更に集團心理學の一部門となるのである。是れ余が嘗て「教育學術界」に於て公にせる一論文「集合心理學の性質及び範圍」に於て論述せる見解である。然るに余の預ねて唱へて居る見解、即ち社會心理現象を以て只心と心の親和團結及び之を基礎として發達する共同的心理現象のみを意味するものと解す

るは穩當でない、社會心理現象なるものは心と心の相互作用及び之を基礎として生起する一切の現象を意味するものであると見る以上は、心と心の親和團結及び之れより生起する共同的心理現象も亦心と心の反對衝突及び之れより起る諸般の反對的衝突的心理現象も共に社會心理現象と觀念せねばならぬと云ふ見解の上から考ふれば、本來親和團結を骨髓とするものと觀念するが穩當と思はるゝ集團心理現象を以て社會心理現象と同一視するは穩當でないのみならず、更に上に述べし如く集團心理現象を特に社會圈及び社會團體の共同的なる心理的特性及び之れより直接に發現すると見做さるゝ共同的心理現象を包括するだけのものと見るは、あまりに其概念を制限する恐れがあると思ふ。それで余は集團心理現象を是れまでよりもやゝ廣き意味に解して普通に社會心理現象と觀念せらるゝものと同じ意味のものを見做さんとするのである。即ち心と心の親和團結及び之より發生し發達する一切の共同的心理現象は集團心理現象であるとするのである。是れ或意味に於ては集團心理現象に於て一般に抱かれて居る概念に逆戻りせるものである。併し余は社會心理現象の概念を普通に解せらるゝよりは一層廣き意味に解し、其中に心と心の反對衝突の現象をも含ましめるのであるから、全く普通の見解に逆戻りせるもの

でない。つまり社會心理現象の概念を普通の意味よりも一層廣き意味に解する結果其の一種と見做す可き集團心理現象の概念をも亦一層廣き意味に解する必要を感じ、それが爲めに偶々普通に解せらるゝ意味に之を解することとなつたのである。然るに尙ほ一層深く探究して見ると共同的なる思想、感情、欲望、意志、及び行動等は必ずしも常に心と心の親和團結のみより生起するものでなくして、心と心の反對衝突の一の結果として産出せらるゝこともある。而してかゝる起源を有する共同的なる心理的生産物もやはり普通には集團心理現象と見做されて居る。而して此く見做すことは敢て不合理ではないと思ふ。それで余は集團必理現象を以て其の起源の如何を問はず、即ち心と心の親和團結より生起するものたると、心と心の反對衝突より又は其の一結果たる強制團結より生起するものたるとを問はず、總て多數者の共同的なる心理的生産物を包括的に意味するものと解するが最も穩當であらうと信ずるのである。近頃集團心理現象の本質に就て新解釋を企てたるブレインナーは、集團心理現象と云ふ名の下に、人類の多數者の心意生活に於て現はれ、同様なる或は甚だ類似せる行爲に導き、或は少くも、同様なる或は甚だ類似せる仕方、に於て表出する處の其等の總ての現象を包括すると云ふて居る。此の集團心理現象の概念は

後に氏が其本質に付て下さんとする解釋に多少引き付けられて居る恐れあるが大體上余が從來の愚見に修正を加へたる上述の概念に類似して居る。Bröner, Zur Theorie der kollektiv-psychischen Erscheinungen, Zeitschrift für Philosophie und Philosophische Kritik, Bd. 141, 1911. 併し余は集團心理現象を主として生産物としての方面に付て觀念し、複數有心者の共同的なる心理的生産物を包括的に云ひ表はすものと云ふ意味に解せんとするのである。

以上述べ來りし處を總括すれば、余はつまり社會心理現象とは一切の心と心の相互作用及び其の作用より生起する一切の複數心理現象即ち二ヶ以上の心の關係を含む心理現象を包括的に意味するものにして、而して集團心理現象とは社會心理現象の一種にして、心と心の相互作用の種類の如何を問はず、其結果として産出されたる一切の共同的なる心理的生産物を特に意味するものと解するのである。それで余はさきに「集合心理學の性質並に範圍」に於て論述せる集合或は集團心理學の概念に修正を加へて新らたに左の如くに決定したいと思ふ。

(1) 一般的社會心理學或は社會心理學原論——即ち一切の心と心の相互作用の過程并に其の一切の生産物の一般的性質を研究するもの。

(2) 特殊的社會心理學或は集團心理學——即ち特に心と心の相互作用より産出せられる共同的なる心理的生産物を研究するもの。

- (a) 社會圈及び社會團體の共同的なる心理的性質を研究するもの。  
 (b) 諸般の文化現象の心理的性質を研究するもの。

### 三

却說余は集團心理現象とは前節に於て論述せるが如く、之を多數或は複數有心物の共同的なる心理的生産物と解するが最も穩當と信ずるのであるが、然らば其本質は如何なるものであるか。

今複數有心物の共同的なる心理的生産物、即ち共同的なる觀念、思想、感情、欲望、意志、行動等の本質を説明する爲めに古來多數の學說が唱へられて居る。併し茲には只前世紀の半頃以後、即ち社會心理學的研究が殊に著しき發達をなし始めたる以後に現れたる主要なる諸學說を概觀するに止めて置かうと思ふ。而して余は其等の主要なる諸學說は大體上三種の類型に區別されると思ふ。一は箇人精神に對して民族精神とか、社會精神とか集團精神とか全體精神とか、客觀的精神とか云ふ種々なる

名稱を以て呼ばるゝ特定の精神が獨立なる實體として存在し、而して此の如き獨立なる實體的精神の作用或は働きとして共同的なる心理的生産物が産出せらるゝものと見る説である。余は假りに此種の學説を實體的集團精神説と稱して置く。二は集團心理現象は箇人心理作用より生來するものであるが、而も之れに對して新しき或物を呈出し、單に箇心理作用のみによりて説明し得られないものである、即ち民族精神とか集團精神とか稱せらるゝ特別な精神が箇人精神以外或は以上に獨立に存在し、而して其の働きのよりて共同的なる心理的生産物が産出せられるのでは無いが、併し又單に箇人精神の働きのみによりて産出せられるものでもない、つまり幾多の箇人精神の結合及び相互作用即ち彼等の創造的總合の作用によりて産出されるものである、而して民族精神とか社會精神とか、又は集團精神とか稱せらるゝものはつまり幾多の箇人精神の創造的總合に外ならないものであるが、而も科學的意味に於て箇人精神が現實的或は實在的であると云はるゝと同じ意味に於て現實的實在的のものと見ると見る説である。余は假りに此種の學説を實在的或は現實的集團精神説と稱して置く。以上述べし二種の學説は何れも形而上學的實體の意味に於てか、又は科學的實在の意味に於てか、とにかく箇人精神に對して集團精神なるも

の、存在を認め、隨ふて箇人心理の働きに對して特異なる社會心理の働きを認めるものである。然るに第三種の學說に於ては、形而上學的實體の意味に於ては勿論、科學的實在の意味に於ても集團精神の特別なる存在を認めず、隨ふて又個人心理的活動以外に特別なる社會心理的活動なるもの、存在するを認めない、而して集團心理現象と稱せらるゝものは、つまり個人精神が一の特異なる境遇より受くる刺激、即ち周圍の人間の境遇 *menschliche Umgebung* 周圍の人々より受くる刺激によりて開發さるゝ個人精神の特異なる反動に外ならないもので、其場合に於ける心理的活動は根本的には他の個人心理的活動と何等異なるものでない。要するに心理的進動或は活動としては只所謂個人心理的活動なるものが存在するのみにして、之れに對立するものとして社會心理的活動なるものは別に存在するものでない、所謂社會心理的活動なるものは個人心理的活動の特定の場合を云ふものに外ならないのである。余は此種の學說を假りに個人心理説と稱して置く。

以上述べし實體的集團精神説、實在的集團精神説及び個人心理説の三者は現今の學界に於て集團心理現象の本質を根本的に説明せんとする諸學說の三種の主要類型であると思ふが然るに第一類型の實體的集團精神説は主として形而上學者の唱



ふるものにして、今日經驗主義的科學的ならんことを主旨とする社會學者社會科學者或は文化科學者の間には一般に排斥されて居る。少くも形而上學的實體の意味に於て集團精神なるものゝ存在するや否やは社會學や文化科學の範圍内に於ては敢て論及す可き問題でないとして不問に附せられて居る。それで余も茲には只第二類型の實在的集團精神説及び第三類型の個人心理説に就て考察するに止めんとするのである。併し現代の民族心理學者や社會學者の中で本來實體的集團精神説を抱持するものゝ如く見做され、或は論評されて居る人々があるから、其の中の最も重要なる二三の學者に就て、彼等は果して實體的集團精神説を抱持して居るや否やを少しく茲に論じて置かうと思ふ。

民族心理學の創設者として集團心理現象の近代科學的研究に大に貢獻する處ありしラツァルス及びシュタインタールは、民族心理學を獨立なる一科學として建設せんとする必要上、其の對象たる民族精神或は全體精神クォーザムトガイストの個人精神に對する獨立存在を主張した。夫れよりして彼等は民族精神を以て形而上學的一實體と觀念するものと見る人々は少なくなかつたが、最近に至つても尙ほ此くの如くに彼等の民族精神の概念を解して之を非難する人々がある。例へば Alexander Pränder, Einführung in die

728 Psychologie, 1904. の如きである。併しラツァルスやシュタインタールは決して民族精神の形而上學的實體説を唱へたものでないとは彼等の論説を詳く吟味して見れば明亮に理解されるとて、現にハイルトマンの如きは彼等が民族精神を形而上學的に考察して其の實體的存在を論證しなかつたとは、彼等が民族心理學を獨立なる科學として建設せんとする企ての根本的缺點にして、此事が論證せられて茲に始めて彼等の主張するが如くに民族心理學は獨立なる科學としての存在を正當に辯護する事が出来るのであると論じて居るのである。Eduard v. Hartman, Das Wesen des Gegenstandes, Zeitschrift für Philosophie und Philosophische Kritik, Bd. 58, Gesammelten Philosophischen Anwendungen zur Philosophie des Unbewussten, 1872. 而してラツァルスが民族精神を形而上學的に考察しなかつたのは、是れ彼は故意に常に形而上學的要素を自分の考察の内より排除せんと勉めて居つたが爲めである。形而上學的要素の排除は彼の學問的良心の命令であつて、又彼の哲學的思考の刺針であつたのである。此事は彼の客觀精神論に於て彼は客觀精神の觀念をヘーゲルより借りながら而もヘーゲルの形而上學的解釋を全然排斥し、純經驗的に之を解釋し考察せんと努力して居るのを見ても明らかである。(Frankenberger, Objektiver Geist und Völker-psychologie, Zeitschrift für Philosophie

und Philosophisch Kritik, Bd. 154. 1914. 参照。而して此等の事實より考ふれば、假令ラッ  
ルスやシュタインタールは時には民族精神の實體的存在を前定するが如き文句を用  
ひて居るにせよ、ハールトマンの指摘して居る如く、彼等は決して之を主張して居つ  
たのでないことが推察されるのである。尙ほ彼等の民族精神の概念其物を直接に  
吟味することによりて、彼等は之を形而上學的一實體と觀念して居らなかつたこと  
を最も明らかに證明することが出来るのであるが、茲にその暇なきを以て之を省い  
て置くが、要するに彼等は民族精神を以て經驗的心理學に於て、箇人精神を一の實在  
と見ると同じ意味に於て一の實在と見るので、つまり實在的集團精神説を唱ふるも  
のであるのである。詳しくは殊に Betschrift für Völkopsychologie und Sprach Wissenschaft  
の最初の五冊に於ける《Einleitende Gedanken über Völkopsychologie》—《Verdichtung des Den-  
kens in der Geschichte》—《Synthetische Gedanken zur Völkopsychologie》—《Die Ideen in der Ges-  
chichte》—《Das Verhältnis des Einzelnen zur Gesamtheit》等の論文及び同雜誌第十七卷に於  
けるシュタインタールがハールマン、プールの批評に答へたる論文、并に彼の Einleitung  
in Psychologie und Sprachwissenschaft, 1881 等参考せよ。

次に今日の社會學の大家中にて殊にツルケムは集團精神の形而上學的實體説を

唱ふるものゝ如くに考へて居る人々は少なくない。それで茲に同氏の集團意識説を吟味して氏は果して其の形而上學的實體を主張するものであるや否やを調らべて見やうと思ふ。全體同氏の説を只今述べし如くに見る傾向が今日の社會學界に於て行はれて居ることに就ては、余の舊師タールド先生が同氏の説に下されたる深刻なる批評は大に責任があると思はれるが (*Tarde, La sociologie Elementaire, Annales de l'Institut internationale de Sociologie, 1895. La réalité Sociale, Revue Philosophique, 1901.*) 併し同氏が其著作論文に於て常に社會的事實は其の箇人的表現より獨立して夫れ自身に於て存在するものなること、集團意識は箇人意識より獨立せる存在を有するものなることを大に高調されて居ることに亦責任があると思ふ。 (*Post, Durkheim's Sociological Objectivism, American Journal of Sociology, vol. IV, 1898—1899 參考*) 併し同氏は眞實集團精神、集團意識は形而上學的一實體であると觀念するのであるか。

今ヅルケムの論ずる處によれば、社會的事實とはつまり箇人意識外に存在し、而して箇人意識に自己を強制的に押し附ける處の行動し、思考し、或は感ずる一定の仕方である。換言すれば個人意識外に存在し、個人意識を強制する處の集團的行動、表象、感情等一言に云はるゝ集團意識の事實である。されば社會的事實或は集團意識的

事實の根本的特性は其の個人意識に對して外的に存在すると云ふこと及び其の個人意識よりも勝れたる精神的勢力を有して之を拘束し、之を強制すると云ふことである。而してヅェルケムが社會的事實に就て常に此等二種の特性を高調せらるゝことは、皮想的に考察すれば、氏は實體的集團精神説を抱持せらるゝが如き感を吾人に起さしむるのである。併し氏が社會的事實、集團意識の個人意識に對する外在性特有存在及び強制性を主張する眞意を詳しく吟味して見ると、氏も決して實體的集團精神説を唱ふるものでなくして、やはり實在的集團精神説を説くものであることが明らかに理解されるのである。茲に詳しく述べて居る暇はないが要するにヅェルケムの考ふる處によれば總て團結せる諸部分より成立する一全體は其の諸部分の總計よりもより大なる、又之れとは異なる或物であつて、其の諸部分に對して新しき性質を有するものである。而して此原則に従ふて社會も其の包含する個人の單純なる總計より異なる或物として、即ち特殊なる實在性を賦與されたる一の體系として吾人に現れるのである。疑ひもなく、幾多の個人意識が與へられるに非らずば集團的なる何物も産出されることは出来ない。併し此主要條件だけで充分ではない。更に與へられたる其等の個人意識が一定の方法、様式に於て團結し結合すると

云ふことが必要である。而して此結合よりして社會生活が成來するものにして隨ふて社會生活を根本的に説明するものは此結合であるのである。個人心は相集合し相融合することに於て一の實在を生む、而して實在は心理的のものと云ふてもよいが、而も新しき種類の心理的特異性を有するものである。此種の新實在の可能は人が化學的結合を論ずる場合に明らかに承認して居るものであり、又生物を成す總合に付ても、其は其の化學的諸元素の單純なる總計以上の或物であるとは何人も認むる處である。而して社會團體は其の個人的要素との關係に於て實に此の種の總合に外ならないのである。社會は其の個人的要素に對して夫れ自身の仕方に於て感じ、考へ行動する處特殊なる實在を現はし、自己特有の精神、性格、習慣等を有つて居る。吾人は孤立せる箇人意識に縶へて之を團體の集團意識と稱することが出来るのである。以上述べし處によりてゾルケムもやはり實在的集團精神説を説くものにして實體的集團精神説を唱ふるものでないことは明らかであると思ふ。尙ほ詳しくは同氏の著作及び論文に於て特に左のものを參考せられよ。

Les règles de la méthode sociologique. Préface de la 2e édition. P. XIV, XIX.

De la division du travail social.

Le Suicide.

Représentations individuelles et représentations collectives, Revue de métaphysique et de morale, 1898.

Sociologie et Sciences Sociales, dans De la méthode dans les Sciences. 2e édition, 1910.

又 Davy, Emile Durkheim, P. 13.—25.

Gaëlke, Emile Durkheim's Contributions to Sociological Theory, 1915, Chap. II. 等をも参照せられよ。

却説上に論述せる處によりて察知せらるゝ如く、現今の社會學者や社會科學者文化科學者の中に於て實體的集團精神説を抱持せるものゝ如くに疑はれて居る人々も、其の實は實在的集團精神説を説いて居るのである。されば今日集團心理現象の本質を考究するに當て、實體的集團精神説は暫らく觀過して置いても差支へはないので、吾人の特に注目す可きは實在的集團精神説と箇人心理説の二者であると思ふ。それで是れより此等の二種の學説に就て特に其の標本的なるものを選び、之を批判的に考察して以て愚見の概要を説述しやうと思ふ。

今實在的集團精神説を考究するに當て、余が其の標本的のものとして茲に先づ考察せんとするはヴントの説である。

ヴントは集團心理現象の本質を説明せん爲めに全體意識全體精神、全體人格、全體

734  
意志、及び民族精神等 *Gesamtbewusstsein, Gesamtgeist, Gesamtpersönlichkeit, Gesamtvillen, volks-seale* の五種の概念を説いて居る。茲に先づ其等五種の概論の一般的意義を簡單に説述し、終に之を總括して以て氏の根本的思想の概要を窺がふこととする。但しゾントの説に付て茲に余の説述することは、後に箇人心理説を論究するに當て特に其の最近の代表者として考察せんとするブレインナーの研究に負ふ處多きを言明して置く。ゾントは先づ全體意識を如何に觀念して居るかと云ふに、氏は意識とは心理的複合物ヒンゼンカイワールデの單純なる總計でなくして其の結合ツッパフメシヤンである、即ち精神的體驗の一般的結合にして、夫れよりして箇々の複合物が其の一層狭き或は密接なる結合として發現するものであると解し、而して此の意識概念に従ふて全體意識を以て一の民族共同体内に於ける表象及び感情の結合であると解して居る。氏の論ずる處によれば此結合は社會内に於て行はるゝ言語、神話及び風俗、習慣の發達に於て表現するものにして、社會は言語、神話、風俗、習慣等に於て個人の産出し得ざる精神的生産物を産出するのである。孤立せる個人は如何に多くあればとて言語や神話や風俗習慣等を産出することは出来ない。此等の精神的生産物は只個人的生活を包含する社會が存立すると云ふ條件の下に於てのみ始めて産出され得るのである。此くて社會より



して個人の産出するとの出来ない新しき或物が生起するのである。而してゼントは此の全體意識と稱せらるゝ個人の間で成立する精神的結合 *interindividuelle geistige Zusammenhang* は個人意識と同等に實在性を有するものと考へて居る。全體意識は夫れ自身一の形而上學的實體でも亦かゝる實體に附着するものでもない。更に個人的意識進動の外に存在するものでもない。併し一の實在である。即ち非實體的な或物であるが併し實在的な或物であり又個人の間で成立する或物であるが併し只個人的意識進動内に於てのみ存在するものである、而して個人意識の生産物に對して新しき或物である處の生産物を産出するのである。ゼントが *Grundriss der Psychologie* に於て説く處に従ふて氏の全體意識の概念本質並に其の特有の働きの大要を述べれば以上の如くであるが、次に氏が *System der Philosophie* や *Ethik* に於て論述せる處によりて氏の全體精神、全體人格及び全體意志の概念を考究して見やうと思ふ。

ゼントの全體精神の概念は本來上に述べし全體意識の概念に一致して居つて、只異なる關係及び目的から見て同一の概念を説くに外ならぬものと思はれる。併し全體精神の實在性を論ずるに當て、氏は精神的有の實在性 *die Realität des geistigen Seins* に對して一般的に妥當と考ふる一定の尺度を説いて居る。此尺度と云ふは即ち事

實的效驗或は效力 *die tatsächliche Wirksamkeit* である。つまり事實的或は實際に效力がある、或は効果を奏すると云ふことが全體精神の實在性を證明するものと見るのである。次にヴェントは又全體人格と云ふことを説いて居る。其の主旨を述べれば、今人格とは統一的なる選擇能力を有する意志を有つて行爲する自覺的なる實在物であると解するに於ては、人格は只個人に付て云ひ得らるるのみで、之を一の全體に適用することは出来ない。併し人格の概念を一層廣く解して、單に自覺的動機によりて指導されたる一ヴェイルンの意志統一アインヘイトと觀念するに於ては、吾人は全體人格なるものを考ふることが出来る。而してかゝる意味に解する全體人格に於ては、自覺と意志は個人格に於けると異なりて一の直接的統一體に結付せずして無數の個人格間に分布されて居る。而して其の總ての意志決定は個人の多數者の間に行はるる相互作用を前定するのである。此の相互作用は多數者に共同的なる表象の媒介によつて行はれるか、又は個人が社會の創造せる規範に従ふて行動すると云ふことを媒介して行はれるのである。然るにかゝる規範は只文化社會に於てのみ存在するものにして、自然社會に於ては存在しない。此くて自然社會の全體人格は文化社會の全體人格はよりも一層大に個人格に類似して居る。是れ自然社會に於ては個人に於ける

如く、印象の感受より全體意志の實行までの途はより簡單であるからである。次に  
 ゴントの全體意志の概念及び其の本質に關する説の大要を述べんに、全體意志の概  
 念全體人格の概念よりは一層廣きものにして、全體人格の存立には統一的意志表出  
 の無制約的自律が必要であるが、全體意志の存立には只統一的意志の表出され得る  
 一全體が成立すれば夫れで充分である。此くて統一的意志表出をなし得る一全體  
 の成立する處には何處にも全體意志が發現し得るのである。而して全體意志は個  
 人意志と同様に實在的である。併し全體意志の實在は個人意志の實在に結び付い  
 て居るものである。是れ個人意志の運トリーガー載者即ち個人がなければ全體もなく全體意  
 志もないからである。されど他の方面から見れば吾人は全く全體より孤立せる個  
 人なるものを知らない、人間は其精神的存在に於ては、全體に緊着するものである。  
 而して全體意志は實在性を有するものと見るに於ては全體の總ての個人を其の運  
 載者となさんとする假定は必要でない。只全體に於て單に總ての個人の總計のみ  
 を見、此くて全體意志に全く實在性を認めない思想のみが全體意志の存立の爲めに  
 は總ての個人の一致が必要であると考へざるを得ないのである。

終りにゴントの民族精神の概念及び本質に關する思想を主として *Völkerpsychologie*

に付て考察せんに、氏は先づ Volkseele と Volkgeist とを區別して居る。而して Volkgeist とはつまり一定の民族或は諸民族の精神的特質をなすものを包括的に云ひ表はすものにして、之れが研究は民族性格學或は民族學の心理學的部門に屬するものである。されば民族心理學に於て研究するものは Volkgeist ではなくして Volkseele である。而して Volkseele (サント)の區別に従へば若し Volkgeist を普通に行はるゝ如く民族精神と譯すれば Volkseele は特に民族心意とでも譯さなければならぬのであるが、茲には便宜上之をもやはり民族精神と譯して置くは物質的箇別有機體に附着すると云ふ條件の缺くることによりて箇人精神アインゼレより區別される。されど吾人が箇人精神或は心意と稱するものは孤立せる状態に於ける心理的要素より成るものでなく、彼等の結合及び夫れより生ずる生産物より成るものである如く、民族精神も經驗的意味に於ては幾多の箇人意識の單純なる總計より成るものでなく、彼等の結合及び相互作用并に此の結合及び相互作用によりて産出せられ、單に箇人意識に於ては生起することの出来ない特有なる心理的及び精神物理的現象より成るものである。併し殊に民族精神特有の特徴と見做し得らるゝものは其の精神的發達の連續性である。箇人精神は其の運載者たる箇人の死滅によりて其の發達は斷絶する

が民族を組成する箇人の絶へず死滅するに係らず、又之を絶へず補充する箇人の生まるゝことによりて民族精神の精神的發達は永久に持續されるのである。而して民族精神は主として衝動的意志行動に於て發現するものにして、動機の意識的秤量を前定する任意的なる行動は民族精神より生起するものでない、又箇人的特性によりて決定されたる意志方向に従ふて箇人の關涉せることが直接に證明し得らるが如き行爲も民族精神より生起するものでない。民族精神は實體的基礎を有するものなるや否やと云ふ問題は、かの精神實體問題ゼイレニスブスメンツが箇人心理學に於て意味を有しないと同様に民族心理學に於ても意味を有しない。元來、精神或は心意は經驗的心理學に於ては單に心理的體驗の事實上與へられたる結合ツイザムメンツに外ならぬものにして、外方又は内方より之れに加はる或物でない。隨ふて民族精神或は民族心なるものも箇人の多數者の一定の心理的體驗の事實上與へられたる結合に外ならずして、外方又は内方より之れに加はる或物でないのである。されば民族心は箇人心の要求すると同一の權利を以て實在的意味を有するものである。而して民族團體の成員間に於ける共同生活によりて生起する精神的生産物は箇人意識内に於ける心理的進動と同様に實在の事實的成分である。社會の生産物并に其の變化を全く箇人的影響に

還元せんとする企て、此くて或意味にて箇人心理學を以て民族心理學を壓倒せんとする企ては、偶然の觀念を缺くことの出来ない説明に到達する。是れ摸倣を以て多くの民族心理的現象の淵源と見る説明に於てもまた避く可からざる傾向である。と云ふのは摸倣されるは特に目につくもの或は常習を脱するもの、即ち箇人が偶然的に爲す處のものであるからである。摸倣は多くの場合に於て共働或は助働の役目を演ずることは確かである。併し共同生活及び其の生産物の深き又一般的な變動に於て嘗て主なる役目を演んずるものでない。

以上ウントが集團心理現象の本質を説明する爲めに用ひて居る全體意識、全體精神、全體人格、全體意志及び民族精神或は民族心の五種の概念に付て述べ來りし處を總括して考ふれば、其根本的思想は左の三者に包括することが出來ると思ふ。

(1) 集團心理現象は個人の多數者に於ける意識進働の結合を基礎として生起するものにして、其の結合は多數者を作る個人なくして考へ得らるゝものでなく、又其現象を経験的に考察すれば之れに對應する何等の實體も存在しない。

(2) 該結合は單に結合する心理的進働の總計たるよりは多くの、又之れとは異なる或物である。而して此のより多くと云ふこと及び異なつて居ると云ふことは創

造的總合に倣らへて個人の相互作用によりて生起するものとして解される。

(3) 該結合は實在性を有する。是れ該結合は事實的效驗を有するもの、或は事實的効果を生ずるものであるからである。

集團心理現象の本質に關するヴントの如上の三ヶの根本思想は實在的集團精神説を唱ふる人々の一般に抱持する根本思想にして、隨ふて右の三ヶの思想を批判的に考察することによりて、以て實在的集團精神説の一般的價値を根本的に決定することが出來ると思ふが尙ほ實在的集團精神説の諸方面の中で茲に述べて置きたいと思ふ一方面がある。蓋し此方面を明らかにすることによりて實在的集團精神説の眞義をヴントの説けるよりは一層詳しく又正確に理解する途が開かれると思ふからである。ヴントはさきにも述べし如く心と心の相互作用の過程を充分に分析して居らないが爲めに、社會意識と個人意識或は社會心と個人心との根本的關係に就て充分なる理解に達して居らないと思はるゝ處があるのである。然るに余が茲に特に述べんとする實在的集團精神説の一方面を明らかに決定して置くと社會意識或は社會心の本質を根本的に闡明し、集團心理現象の本質を深く理解する上に甚だ便宜であるのである。然らば其方面とは何であるかと云ふに、是れ社會意識を以

742  
て自己意識と同じく個人意識の一部分或は一方面と觀念し、而して社會精神或は社會心を以て只部分即ち個人心に於てのみ現實なる存在を有するが而も其形式或は表現に於て其等の部分即ち個人心の何れとも、亦單に其の總計とも同一視されない一全體と觀念することである。此くの如くに社會意識と個人意識との關係を觀念することは社會學者間にありては舊師ギヅチングス先生の思想に於て明らかに認められるが、(Giddings Principles, of Sociology 第三版序文參考之を詳しく展開したるはデヴィスであると思ふ。Davis, Psychological Interpretations of Society, 1909 吾人は社會意識と個人意識との現實的關係を先づ此の如くに決定して置いて夫れより個人意識の一部分或は一方面として如何にして、自己意識或は自我意識が発生し發達すると相伴なふて社會意識が発生し發達するかを發生的に研究することによりて、最も正當に社會意識、社會精神の本質を理解し、更に集團心理現象の本質を理解するに至るであらうと信ずるのである。併し此事に就ては最後に實在的集團精神説と個人心理説とを比較的論評して愚見を述ぶる場合に尙ほ詳しく論ずることとして、次に實在的集團精神説に反對して起れる最近の個人心理説の主旨は如何なるものであるかを、少しく説述して置きたいと思ふ。(次號完結)